

『春水』所感：国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流」に寄せて

萩野， 脩二
関西大学：名誉教授

<http://hdl.handle.net/2324/1912115>

出版情報：「『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、冰心、濱一衛」国際シンポジウム論文集. 1, pp.1-2, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



『春水』所感

——国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流」に寄せて

関西大学名誉教授 萩野 脩二

中里見敬教授の尽力により、九州大学 QR プログラム主催で、九州大学附属図書館などの共催による「第 1 回『東アジアの交流と文学』国際シンポジウム——『春水』手稿と日中の文学交流」が開かれることになりました。中里見教授に感謝するとともに、シンポジウムに参加される皆さんにもお祝いを述べさせていただきます。

私は縁あって、中里見教授から何か一言「あいさつ」をとの勧誘を受けました。本来このシンポジウムに喜んで参加すべきでありましたが、体の調子から欠席させていただきます。折角のお誘いなので、厚かましく、些細な感想を述べて、「あいさつ」に代えさせていただきます。

ご存知のように、冰心の『春水』は 1922 年 3 月 21 日の『晨报副鐫』に発表され 6 月 30 日で終わっています。五四運動を 1 つのメルクマールとするならば、中国文学は大変若い時期であり、冰心も『春水』も大変若かったと言えるでしょう。1922 年 1 月 1 日の『晨报副鐫』の「新文芸」欄に載り、のち「詩」欄に移って 1 月 26 日まで掲載された『繁星』の若さと同じくらいだと言えるでしょう。

“若さ、が共通する言葉であるように私には思われます。したがって『繁星』には「天空」とか「宇宙」「大空」そして「大海」「月明」など「自然」がのびのびと歌われ、それはあたかも青年の向こう見ずな飛翔と冒険心を表しているように見えます。それに対して『春水』では、「宇宙」はあるものの「大海」「自然」などはなく、「上帝」「先駆者」「造物者」などのことばが目につきます。でも、大きな違いは『繁星』では「父親」「弟々」「祖父」などの家族のことを歌っているのに対して、『春水』ではそれらの言葉は一言も出てこないことでしょう。「母親」はありますが、『繁星』では 9 回であったのに、『春水』では 4 回に減っています。『春水』は家族の範囲から脱して、大きく飛躍しているとも言えます。

先ほど、私は『春水』も『繁星』も若いのだと言いましたが、若さは必ずしも明るく活発な面ばかりではなく、一面に青年の持つメランコリーな部分もあります。つまり陰鬱で暗い面もあるのです。『繁星』の「春光」「光明」「歡樂」「溫柔」「幸福」「愉快」などに対して、『春水』では「暗淡」「黯淡」「黒黯」「悲哀」「悵惘」「愁苦」「寂然」「煩惱」「憔悴」そして「弱者」「弱小」「微弱」「無力」などの言葉が多く見えますが、それば、『春水』が『繁星』に表現された青年の明るさつまり「明」に対して「暗」の部分表現していると

言えましょう。

『春水』は、青年の持つ明と暗の部分のうちの暗の部分に歌った若き文学であったと言えるかもしれません。

以上が私の拙い感想です。まだまだ言うべきことがあるとは思いますが、後の精密な論はシンポジウムに参加される若い皆さんにお任せして、私の「あいさつ」を終えることにいたします。

シンポジウムの成功を祈ります。

2017年12月16日